成立したと言えるのではないか。

中巻はその後、おそらく天祿二年六月の鳴滝参籠の後、上巻よりも、もっと不幸な自分を知ってもらおうと書き始めたものであろうと考えるものである。

西鶴「本朝二十不孝」について

二十七回生　吉田祐子

目次

序
本論
第一章　西鶴の創作意識をめぐる諸説の検討
第二章　西鶴の創作意識
第一節　序文及び二十話についての考察
第二節　『二十四孝』説話との関係
結び

西鶴の浮世草子『本朝二十不孝』は五巻五冊から成り、各巻四話、全二十話の短編小説集である。本書の成立は、序文の年記には「貞享三三稔孟陬日」とあり、一方、刊記には「貞享三暦丙寅霜月吉辰」とあり、今のところどちらとも断定されていないが、本書刊行当時は熱心な『孝経』の信仰者である将軍綱吉の統治下にあった。つまり、『本朝二十不孝』という題名は、当時流行した『二十四孝』『大倭二十四孝』に対して「四」の一字を「不」に置き換えるという着想によるものと言える。

しかし、西鶴の創作意識に関しては未だに定説が立てられていない。そこで、私は当時の時代背景、及び西鶴が読者として意識した町人の思想を明らかにし、さらに、作品の内容分析を進め、西鶴が如何なる意図の基に本書を執筆したのか、という点を探っていくことにする。

第一章　西鶴の創作意識をめぐる諸説の検討

西鶴がどのような創作意識を持って本書を執筆したかと

いう問題は、未だに定説を見ていない。即ち、暉峻康隆氏が述べておられるように、「思想的トピックとしての孝道に対する関心が、西鶴に『本朝二十不孝』を書かしめた」(注1)とする点、さらに、不孝咄という型で読者の意表をついた着想に卓抜さがあるとする点については、暉峻氏を始め、野間光辰氏(注2)、横山重氏(注3)、小野晋氏(注4)、矢野公和氏(注5)、谷脇理史氏(注6)、岡本勝氏(注7)、各氏の見解は一致しているものの、序文、及び教訓的言辞をめぐって、大きく四つの見解が対立している。

その一つは野間氏の見解である。野間氏は、西鶴が『本朝二十不孝』を書き上げた意識として、将軍綱吉の孝道奨励政策への批判という点を上げておられる。一方、中村氏(注8)、横山氏、小野氏は、序文、及び教訓的言辞を文字通りに受け取り、〈孝にすゝむる一助〉として孝道奨励に資しようとしたという見解を出しておられる。矢野氏もまた、西鶴のこの談理・教訓的な意識を認めてはいるものの、それを単なる孝道奨励ではなく、むしろ皮肉めいた眼で孝道を見据えているという見解である。これに対し、谷脇氏、岡本氏は、前述のような意図は認めず、西鶴の戯作意識という点に重きを置かれている。以上、大きく分類した四つの見解が、現在対立している諸説である。

西鶴は、『本朝二十不孝』において如何なるものを不孝として取り上げ、不孝者に与えている結末にどのような意図があるのだろうか。そして、見解の対立の一原因となっている教訓的言辞の存在と性質は、どう考えるべきなのであろうか。これらの問題を中心に論を進めたい。さらに、『二十四孝』との関り方を検討し、西鶴の本書執筆の創作意識を探ることにする。

(注1)「本朝二十不孝」『西鶴　評論と研究』(上)第八章
(注2)「西鶴と西鶴以後」『岩波講座日本文学史』
(注3)(注4)『本朝二十不孝』の解説　岩波文庫
(注5)「本朝二十不孝論」『国語と国文学』昭和四十八年六月
(注6)「本朝二十不孝論序論」『西鶴』日本文学研究資料叢書　有精堂
(注7)「本朝二十不孝の一側面」愛知教育大学国語国文学研究　第三十一集
(注8)「西鶴の創作意識とその推移」『近世小説史の研究』

第三章　西鶴の創作意識

第一節　序文及び二十話についての考察

項目別に論を進めていくことにする。

A場所について

西鶴は主人公が不孝の行為を行う場面を全国にわたって設定していると言うことができる。このような諸国ばなしの形式は、本書刊行の前年、貞享二年『西鶴諸國はなし』において既に用いられている。また、巻二の三の「伊勢国

鳥羽」、巻三の三の「陸奥宇都宮」は、実際は、それぞれ志摩、下野国である。これは、西鶴が実際の地名よりも俳諧の世界で使われている地名を用いたものと考えられる。

つまり、この諸国ばなしの形式は、初めて一つのテーマと取り組んだ西鶴が、それ故に読者を退屈させないように、話に変化をもたせるために用意した執筆手段と取ることができる。

B不孝者について

不孝者の名前についてはほとんど明記している。但し、巻一の四は主人公を「子」と表現し、巻三の三・四、巻四の二は、主人公以外の不孝者を、それぞれ「女」「子」「妻」としている。

不孝者の親の職業を見ると、商人が一番多く二十話中十六話、その他百姓（後舟頭）・山家住い・舟乗りというのが一例ずつ見られる。商人を意識していること、さらに、西鶴が生粋の難波っ子であったことが考えられる。

次に、その性別であるが、男性を不孝者として描いているのが十四話、女性四話、男性女性両方を描いているのが二話である。しかも、女性を主人公とする話は、各巻に一話ずつ置かれている。

つまり、以上の三点は、多分に読者を意識したものと思われる。読者になぐさみ物として本を提供しようとする西鶴が、「不幸」という統一テーマからくる話の単調性を避けるために用いた趣向と考えられる。

C不孝の行為、及び不孝者の最後について

不孝者の言動を五つの類型に大別し、その結末をまとめると次のようになる。

①社会的悪の存在に原因があるもの
②家族・村への反逆として現れているもの
③主人公の盲目的行動や性癖によるもの
④因果・宿命にまつわるもの
⑤親いびり

分類①と分類②の不孝の行為は、一例（巻四の四）を除いて、貧窮、金銭の問題がからんでいる。この問題は、当時の町人にとって最大の関心事だったと思われる。人が金を得ようと欲望を持つ以上、その人は〈常の人〉ではありえない。西鶴は主人公を特別の世界の人間ではなく、彼自身にとっても読者にとっても、身近な世間一般の息子、ないし娘と設定することにより「常」であることの困難さを提唱しているのである。

分類③には、不孝者が生き残っている八話中六話までが入っている。「好色」をも人間の一面として認めることができた西鶴は、盲目的行動や性癖も悪業でない限り、やはり人間の一面として認めていたのではないだろうか。よって、これらの結末は〈孝なる道をしらすんは天の咎を遁るへからす〉という序文の言葉に、単に、対応させたものと見るべきであろう。そこには、あくまでも話を序文に対応させようとする作者、「不幸」を統一テーマとして貫こうとする作者西鶴の姿を見ることができる。

分類④には、二話しか見られない。しかし、仏教的な考

え方である「因果」が八例、儒教的な考え方である「天」もしくはそれに準ずるものが十例見られる。即ち、儒仏相寄り添ったところに、『本朝二十不孝』は成立しているのである。つまり、「孝」「不孝」に対する西鶴の基本的立場は、常識的なところに存しているということになる。

分類⑤の三話は、いずれも家庭は金銭的に恵まれていな

巻話	分類	社会的悪、及び不孝の行為	結末
巻一の一	①②	死一倍の借金・親を殺そうとする。	事故死
二	②	妹を殺し、金を盗み出し、家を破滅させる。	事故死
三	③	身持ちが悪い。	餓死
四	③	点取勝負に夢中になる。	零落
巻二の一	②③	家に押し入る・強盗	処刑死
二	③	親に金を盗るように勧める。身持ちが悪い。殺人。	処刑死
三	③	家職を捨てる。	責苦
四	① ②	＜世の聞え＞＜外聞＞がなければやっていけない経済社会 偽りの遺言通りの金を兄に請求する。	敵討
巻三の一	②④	家に押し入る・四人が懐妊して死んでしまう。	②事故死 ④餓死
二	①	賭博・投機	殺害
三	②	漆を一人占めする。	事故死
四	②④	仏前を荒らす・子供が親の殺人を証言する。	自殺
巻四の一	②⑤	家の金を盗み出し・家を落ちぶれさせる・親に仕立てている老人に按摩をさせたり、蚊をはらわせたりする。	餓死
二	⑤	姑を逆うらみして夫婦ともに家を出る。	自殺
三	⑤	継母を追い出す。	事故死
四	②	母の面影に弓を射る。	追放
巻五の一	②③	家の貧窮の時、踊りの練習する。	追放
二	③	酒におぼれる。	悔恨
三	③	相撲に夢中になる。	大けが
四	③	けんか好き。	商売繁盛

がら、主人公は破滅の一途をたどっている。即ち、人間が転落する誘因を、人間の外ばかりでなく内にも存在していると、捉えているということになる。

以上のように、不孝者の行為、結末を見ると、各巻に特色が見られる。巻一は原因に統一性がない。巻二は主人公の盲目的行動や性癖によるものを中心としている。巻三は家族・村への反逆としての不孝の話が多く、特に、因果・宿命によるものが編集されている。巻四は親いびりの話である。巻五は巻二と同様、盲目的行動や性癖による話によってまとめられている。

これらの不孝者に対して、西鶴は序文に〈不孝の輩眼前に其罪を顯はす〉と書いているように、必ず結末を用意している。しかし、全体の割合からすると、不孝者が不孝者たる原因、そして、〈悪人〉へ傾斜していく描写に力を注いでいるということができる。

ここに描かれた不孝者を、西鶴は序文で〈悪人〉と表現している。西鶴にとって、〈常の人〉とは〈夫々の家業をなし祿を以て万物を調へ教を盡せる人〉である。しかし、このような〈常の人〉であることは難しいと言っている。そして、〈常〉でない人を「不孝者」として提示し、破滅人間解体の道をたどらせているのである。

D 親の最後について

親について触れている十九話を、その様態別に分類すると、次表のようになる。

親の様態	巻	話
生存	巻一の一、巻二の一、巻三の一・三、巻四の一、巻五の一・三・四	
自害	巻一の二、巻三の二、巻四の二	
悔み死	巻一の三・四、巻二の三、巻五の二	
処刑	巻二の二	
出家	巻四の三	
病死	巻二の四	
死	巻四の四	

この表からわかるように、各巻の第一話に描かれた親は生存している。その上、巻五に至っては四話中三話まで親は生存しており、しかも、第一話と第四話は不孝の結末ではなく、孝行の結果が描かれているのである。このような作品の最後を「めでたしめでたし」で終らせる手法は、先の『好色五人女』にも見られる。このように、最後に幸福な結末を用意していることは、読者を意識した西鶴の作家意識に基づく編集上の工夫と思われる。

E教訓的言辞について

『本朝二十不孝』には、次のような教訓的言辞が見られる。

①欲に目の見えぬ金の借手は今思ひあたるへし。（巻一の一）

②世にかゝる不孝の者ためしなき物かたり懼ろしや忽ちに天是を罰し給ふ慎むべし（巻一の二）

③惣じて女の一生に男といふ者もの独りの事なるに。其身持あしくさられて。後夫を求むるなどする女の事なり。人たる人の息女はたしなむべき第一なり。縁結びて二たび歸るは女の不孝是より外なし。（巻一の三）

④無用の道心何の見付所もなく。尊き事をも弁へず。無我無分別の發心。親に思はざる外の氣を惱ませ。是競なき不孝坊といへり。（巻一の四）

⑤己その辨あらばかくは成まじ。親に縄かけし酬目前の火宅。猶又の世は火の車鬼の引肴になるべしと。是を悪ざるはなし。（巻二の一）

⑥おのれ出れば子細なくたすかる親を。是ためしもなき女なりと憎ざるはなかりけり。（巻二の二）

⑦かゝる浮世習にて親は憐み子は孝を竭を道なり。（巻二の三）

⑧此藤助か身の難儀は皆親の言葉を背きし罰ならんとおもひやりぬ。（巻二の三）

⑨家榮へ家滅ぶるも皆これ人の孝と不孝とにありける。（巻二の四）

⑩此大悪いづく迄か遁るべし。（巻三の一）

⑪此盗人の仕合明て悔かるべし。（巻三の二）

⑫人の仕合はしれぬ物ぞかし。然れ共分限に品々あり。世間にかはらず其身相應の衣類を着て朝夕も折ふしの魚鳥を味ひ。貧なる親類を取立下々を憐。神を祭仏の道を願ひ親に楽をあたへ。他人の義理をかゝず。万事直にして冨貴なるは天の惠みふかく人の本意なり。（巻三の三）

⑬天まことを照し善悪をとがめ給ふにや。（巻四の一）

⑭まことに悪事千里（巻四の三）

⑮孝あるゆへに天のあたへ。（巻五の一）

以上の、これまで教訓的言辞として上げられていた十五の文章を、考察してみると、明確に不孝者に対する教訓であると判断することができる言辞の存在は認められないのである。しかも、これらの言辞は、対象も不孝者に限られていなければ、「～すべし」というように積極的に孝行を奨励するものも認めることはできない。何かしら「教え」的なものを含んでいる言辞⑨⑫は、いずれも近世町人として台頭するための条件として、西鶴は提示していると思われる。よって、このような教訓的言辞の存在をもって、西鶴の創作意識が孝道奨励にあったとは言えないということになる。即ち、これらの教訓的言辞の存在は、序文〈孝にすゝむる一助ならんかし〉に対応させようとする西鶴の工夫と思われる。

では、巻四以降の教訓的言辞の減少はどう考えるべきだろうか。巻四以降、三例（巻四の一・三、巻五の一）見ら

れるが、いずれも短文であり、その強さは他の言辞に較べると、特に弱いものとなっている。これは、序文〈孝にすゝむる一助ならんかし〉に対応させようとする意識の欠如ではないだろうか。巻五に到ると、四話中二話に幸福な結末を描いており、しかも、不孝者にはその最後として「死」を与えていないからである。

以上、本書の内容をA・B・C・D・Eの五つの項目に分け、検討を加えてきた。その結果、読者に面目おかしく読ませようとする戯作意識が認められた。但し、本書の意義はそれだけではないだろう。西鶴は金銭や貧困の問題、自我の欲望の問題、盲目的行動や性癖に関する問題を〈常〉であることの困難さという点において認識していたと思われるからである。つまり、内容を個別的に分析した結果によると、孝道奨励に資しようなどという姿勢は認められないのである。

第二節　『二十四孝』説話との関係

『二十四孝』が、本書刊行以前に如何に流布していたかという点については、『日本文学大辞典』により明らかである。よって、西鶴は『二十四孝』について知識を持っていたと思われる。では、実際に『本朝二十不孝』の中に、『二十四孝』はどのように生かされているのだろうか。

本書における登場人物の行為と、『二十四孝』の行為を関連させたのが表①である。

表①

『二十四孝』			『本朝二十不孝』		
話	内容	巻・話	内容		
漢文帝	食事の試食をする。	一の一	覚えず毒を試して死ぬ。	序	四の三
丁蘭	母の形を木像に作り、仕える。	三の四	仏前を荒らす。		
		四の四	母に化した狸に弓を射る。		
孟宗	病気の母が冬なのに竹の子を求める。	序	雪中の笋八百屋にあり。		
		一の二	惣領文太左衛門がない物食うと言う。		
閔子騫	継母に憎まれながらも、継母を追い出そうとする父を諫める。	四の三	継母の恩も忘れ、父にないことを告げ口し、追い出す。		
王祥	継母のために氷中から魚を得る。 継母が、父に玉祥を憎ませたにもかかわらず、よく孝行した。		鯉魚は魚屋の生船にあり。 告げ口し、父に継母を憎ませて追い出す。		

老來子	親が年をとったと思わないように、幼い者のようなふるまいをする。	五の二 一の一	酒におぼれて、死ぬまで心配をかける。 死一倍の借金をするため、親が年老いていて、あまり長くない、と偽る。
姜詩	生魚の鱠を母が好むので、遠くの江まで行き、取っていると、家の前に江の水が湧き出た。	序 三の一 三の二	鯉魚は魚屋の生船にあり。 入婿が山家に住みながら、遠い海の魚を調えてくれた。 家を売り、母には飯を焚かせ、父には水仙を作らせ、山刀豆や胡瓜の種を売らせる。
唐夫人	唐夫人は姑によく仕え、その報いにより、一家が繁盛する。	四の二 五の一	母親が子供のために命を捨てる。 嫁が姑を嫉み、家を出る。 嫁が姑によく仕える。
楊香	虎に出会った時、父だけは助けてくれるよう天に頼み、虎口の難を逃れた。	二の二	小吟の身替わりに、父母が処刑された。
董永	身を売り、父の葬式をする。	一の二	両親を助けるために傾城屋に身を売る。
黄香	父によく仕え、夏には扇いですずませ、冬には身を持って温めた。	一の二	風がぬるいと言って、妹を投げ殺す。父母に仕えず、お金を盗んだりする。
郭巨	母が孫に少ない食事を分け与えているのを見て、子供を埋めようとする。堀ると、黄金の釜が出てきた。	一の四 二の一	四人の子供の面倒を親にかける。 釜煎りの刑に処せられる。
朱壽昌	官禄も妻子も捨て、母に会うために血で経を書き、天道に祈る。	一の四	親の意見を聞かず、出家してしまう。
庾黔婁	父の病が治るように北斗の星に祈り、身替わりになることを願う。	一の一	父が早く死ぬようにと諸諸仏に祈る。
呉猛	衣を脱いで身を蚊にくわせ、親の方に行かないようにする。	四の一	仮の親に、終夜蚊を払わせる。
日眞田廣田慶	兄弟で財産を三等分したが、木だけは心があるとして切らなかった。	二の四	兄弟で財産争いをする。
山谷	母の大小便の世話をする。	五の三	相撲に負けて体が不自由になり、親に大小便を取ってもらう。

表①より、本書と『二十四孝』との関り方を見ると、『本朝二十不孝』に描かれた孝行の行為をそのまま踏襲しているものと、逆設定になっているものとがあることがわかる。但し、その逆設定の仕方には三種が考えられる。よって、本書と『二十四孝』の関り方は四種に分類される。

㈠『二十四孝』における孝行の行為をそのまま孝行として描いているもの。

㈡『二十四孝』における孝行の行為を皮肉なあるいは否定的な取り上げ方をしているもの。

㈢『二十四孝』における親の行為を子供にさせることによって不孝者を描いているもの

㈣『二十四孝』とは正反対の行為をさせているもの

それぞれの行為を、以上四種に分類したのが次表である。

分類	『二十四孝』及び本書の巻・話
㈠	姜詩・三の一　董永・一の二　唐夫人・五の一
㈡	漢文帝・一の一　孟宗・序　王祥・序　郭巨・二の一
㈢	孟宗・一の二　姜詩・三の二、四の二　楊香・二の一　呉猛・四の一　山谷・五の三
㈣	丁蘭・三の四、四の四　閔騫・四の三　王祥・四の三　老來子・一の一、五の二　唐夫人・四の二　黄香・一の二　郭巨・一の三　朱壽昌・一の四　庾黔婁・一の一　田眞田廣田慶・二の四

『二十四孝』における孝行の行為をそのまま取り上げているのは分類㈠だけであるが、いずれも主人公ではない、所謂不孝者と対置させるために描かれた人物の行為である。但し、幸福が訪れているのは、「唐夫人」を踏襲している巻五の一だけである。これは『二十四孝』の二十四話の中で、唯一の庶民の世界でも有り得る孝行の報い、即ち、姑によく仕えることによって訪れた一家の繁盛を描いている話である。結局、西鶴は現実性、実現性のある「唐夫人」だけは肯定的に見ていたが、その他の『二十四孝』における孝行の行為は、批判的に取り上げていたということになる。しかし、不孝者は巻五の四以外はすべて何らかの形で罰せられており、不孝を肯定しようという傾向は見られない。西鶴は、『二十四孝』のような非現実的な応報を批判的に見ていたのではないだろうか。

しかし、このような『二十四孝』批判精神を、西鶴の創作意識であると断定することはできない。というのは、不孝者の行為そのものに反『二十四孝』の行為が投影されているのは、巻一の四、巻二の四、巻四の四、巻五の二の四話のみだからである。

よって、本書の中心主題を、『二十四孝』の逆設定により不孝譚としてまとめようとしたと決定することはできない。西鶴は、ほんの一場面を『二十四孝』と関連させる方法を多く用いているのである。『二十四孝』の逆設定というのは、一場面における一趣向と捉えるべきではないだろうか。故に、西鶴が『二十四孝』を批判的に見ていたのであろう

ことは認め得るが、それをもって、本書を執筆するに当たっての中心目的とは言えないのである。つまり、西鶴の『二十四孝』批判精神の実質というのは、『二十四孝』に描かれた孝行の行為そのものを批判するというものではなく、『二十四孝』的応報に対する批判であったと思われる。

結　び

本書を分析した結果、諸国ばなしの形式を用いている点、主人公の名前を明記している点、親の職業に商人が多いこと、各巻に一話ずつ女性を主人公とする話が入れられている点、最後の巻の第一・四話を「めでたし」で終らせている点に面白おかしく書くという戯作意識が認められた。また、不孝者がとる行為、及びその結末を見ると、西鶴は、人間が〈悪人〉へ傾斜していく原因を内にも外にも用意している。そして、〈常の人〉でない人間を不孝者として設定し、破滅の道をたどらせている。しかし、破滅の描写は短い。これは、単に序文〈不孝の輩眼前に其罪を顯はす〉に対応させたものなのである。

教訓的言辞は、視点、強弱の違いから、その目的が教訓することにあるとは考えられない。では、教訓的言辞の存在は何を意味しているのであろうか。当時の孝道奨励という政治的背景の下に「不孝」をテーマとして掲げたこと自体、読者の意表をついたことは当然であろう。しかし、西鶴にとって、本書を刊行することはかなり勇気を要したと思われる。それは、天和二年五月の触書の中に、〈新作えぢならさる書物商売すへからさる事〉という一条が設けられているからである。つまり、本書の教訓的言辞は「不孝」を統一テーマとして掲げた西鶴の、その立場を序文にあるように、孝道奨励と見せかけるための一方便だったのではないだろうか。つまり、序文の〈孝にすゝむる一助ならんかし〉も虚構であるし、教訓的言辞も序文に応じた虚構と思われる。故に、当時流行していた『二十四孝』を、西鶴は意識していたのである。しかも、その批判精神は、『二十四孝』的天の配慮に向けられていたと考えられる。

町人が町人として台頭するためには、金を得なければならないし、欲望を持たなければならない。これでは〈常の人〉ではありえない西鶴は、この点を現実社会の中に嗅ぎつけていたのである。そして、この事実を読者に提供するために、浮世草子作家西鶴としては、前述のような趣向を凝らし、面白おかしく表現したのではないだろうか。読者にとっておかしければおかしい程、切実に感じられたにちがいない。孝行者ではなく、敢えて不孝者を列挙した理由がここにあると思われる。西鶴の創作意識は、幕府の行う孝道奨励に対して批判精神を抱きつつ、現実社会の中に、〈常〉でない人間像を描くことによって、人間の裏面に目を向けようとするところにあったと考えられる。